

GM熟議場 目的 (学習会併置型熟議場のモデルの一つとして検証⇒ハイブリッド型GM juryでの課題発掘)

第1段階 振り返り

北海道GM論争

◆目的

振り返り
語り合い
共感と共有
探す

◆参加者

論争関与者
旧対話場経験者

◆反省

参加資格基準
性格
信頼性
議論の枠組
遵守の難しさ

◆成果

共通認識獲得
⇒感情的対立
の回避

2010年3月13日

第2段階 考察

GMO班で検討

◆信頼できる
少人数での議
論の積み上げ

◆現状把握

・北海道GMコン
センサス会議市
民の提案
・(旧)大規模対話
フォーラム共同
宣言

◆討論で
議題決定

◆周知徹底:

北海道GM条例
批判の議論をし
ない
⇒参加者に確認

◆「共有できる」と
「共有できない」
の確認作業

第3段階 GM熟議場 in 北大 2010年10月9日～2011年1月8日

第1回熟議場

◆目的 確認作業: 北海道GMコンセンサス会議「市民の提案」
テーマ発掘

◆結果 もしもの議論(具体的題材)
⇒「飼料イネ」⇒「GM飼料イネ」・・・メリット・デメリットを考える

第2回熟議場

◆目的 飼料を国産に転換するとき生じる諸問題。
飼料イネは流通できるか、GM飼料イネではどうか

◆結果 ⇒共有 ●飼料イネ・米は食料自給率を上げる。
●飼料イネとしてのGMは受容できるかも
⇒「飼料イネがOKなら他もOK」は、共有できない

第3回熟議場

◆目的 知る＝北海道の飼料イネ・米の現状と課題
議論の整理

◆結果 仮想議論 「町内農家がGM飼料イネを栽培。
あなたはどうしますか、考えますか」
・共有＝安全審査繰り返し。十分な情報提供。付加価値のあるGM作物。
・できない＝交雑しやすいトウモロコシやナタネの栽培。生態系への影響
があるもの。安全性への保障・保証がある(今はないと考えた)

◆発見 GM大豆やテンサイを作りたい農家がGMイネ絶対反対と発言

実験的議論 ◎共有できる/できない ◎事実と憶測の区別
今後の作業 ◎If と現実の差異を確認 ◎差異の扱い

学習会併置型熟議の場 目的(二つのリテラシーの接合)

■農学交流広場

- 目的 ●本PJへの関心の喚起
●人(地域・札幌市民、若手研究者)と情報の出会い

- 「コンポストのひみつ」
話題提供: 大学教員
地域のネットワークとの協働
- 「おいしさを科学する」
話題提供: 大学院生、栄養士
- 経過
2010年5月～8月/3回

設計=情報提供と質疑応答
+参加者同士の意見交換
+専門家との交流
結果=高い満足度
推測=知識獲得の喜び
+参加者間の交流

緩やかな連携
・コープさっぽろ:
実行委員会
監督委員会
・消費者協会:(道・札幌)
実行委員 スタッフ

・メディア(現時):
個人参加段階
車座の難しさ

・道農政部
実行委員会/監督委員会
・企業 巻き込みの難しさ

ハイブリッド型 GM jury への接続

■興部対話フォーラム目的と経過

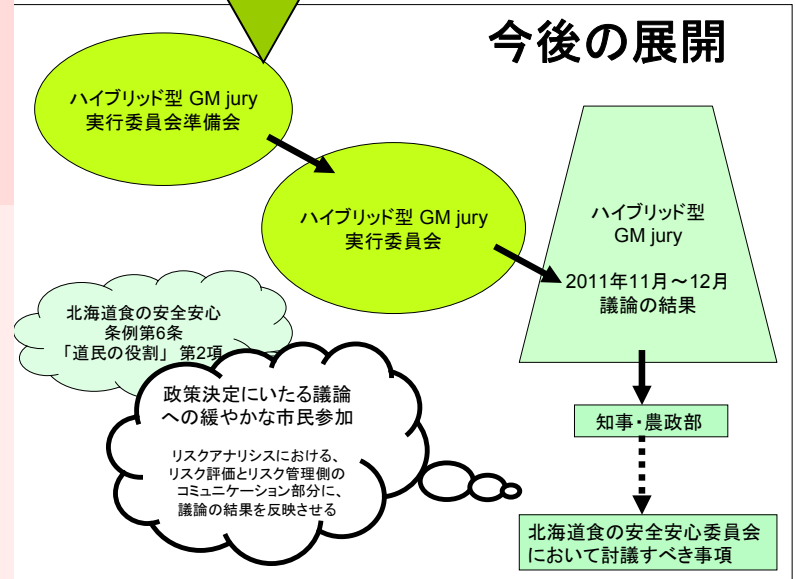
- 目的
小さな町でのリスクモデル開発
テーマ(食)を探すのは参加者
- 経過
2010年4月～10月/3回
新聞記者も加わった車座討論会

- 一番の関心事
地元のもの食べたい
(出回っていない)
- 今後の課題
「地元のもの食べる」と
「食の安全」の結び付け方

■札幌消費者協会「アミノ酸(+脂肪酸とトランス脂肪酸)学習会」

- 目的
専門家と市民との意思疎通の深化
消費者: 質問の質の向上
専門家: 市民と向き合う際の作法体得
- 経過
2010年5月～10月/3回
専門家=日本食品分析センター

- 結果
・BSE熟議場での質問内容の背景となった
・仮想事例での討論をKJ法を用いて意見集約



到達点:

- ①リスクコミュニケーション・モデルのプロトタイプ(案)創出
- ②実装一歩手前

克服すべき課題

- ◆「GM jury」での予算と人員
- ◆市民の集め方の内部議論
- ◆道庁:連携の程度確認
- ◆コープさっぽろ:連携強化
- ◆情報発信の強化
- ◆車座+メディアと連携(個人レベル→上のレベル)

①モデルの提案

- ◆BSE熟議場⇒
- ◆学習会付き熟議場⇒
- ◆ハイブリッド型GM juryとその実践過程⇒

②会議に関する協力要請

- ◆ホクレン(農薬)
- ◆コープさっぽろ
- (TPP, GMO, BSE...)

リスクコミュニケーション・モデルの提案先

- ◆コープさっぽろ 組合員活動部 リスコミを一般会員に行う
- ◆消費者協会 エビデンスを考慮したリスクの受け止め方を学ぶ場として
- ◆道庁 GMO・BSE全頭検査問題でのリスコミ実施モデル案
- ◆家庭科教員 理科教員との「共通認識事項」の組立て方の議論

将来目標

- ・ステークホルダー間での「共通了解事項」の共有を図る場の構築につなげる
- ・大学の「社会技術」の知を社会に還元するシステムの構築

研究計画

【三段階モデルの適用可能性チェック】
・BSE全頭検査継続問題

【研究者の社会リテラシーと市民の科学リテラシーの接合】
・学習会併置型熟議の場
・農学交流広場

【メディアとの協働】
・車座討論会

【社会実験】
・GM Jury
関与者による協働作業

双方向的リスクコミュニケーションのあり方

初年度 2年度 3年度 4年度 終了

グループ発表(GM熟議場)



第2回興部フォーラム会場
(モーモー城)



農学交流広場



関係者の鼎談(BSE熟議場)

